



名プレイヤー出身の作曲家たち

鈴木淳史

クラリネット奏者であり作曲家のヴィトマン
©Marco Borggreve

作曲家は演奏家でもあった

餅は餅屋。ピアニストはピアノだけを弾き、作曲家は作曲に専念する、という分業が現在では当然のこととして受け入れられている。それぞれに高度な専門性が求められる時代になってきていることもあろう。

しかし、そういった分業は長い音楽史のなかでは、あまり一般的とはいえない。たとえば、今月読響が演奏会で取り上げる作品を並べても、そのほとんど全員が演奏家としても活躍していた作曲家のものばかりなのだ。

ヨハン・シュトラウスⅡ世は、自らの楽団を率い、ヴァイオリンを弾きながらワルツやポルカを指揮した。昼に

作曲、夜は演奏会や舞踏会という日々が続いたという。

サン＝サーンスはパリのマドレーヌ教会のオルガン奏者だった。ブルックナーもリンツの大聖堂のオルガン奏者を務め、ロンドンに招かれて演奏会も行った名手だ。

ベートーヴェンは、即興を得意とするピアニストとして知られていた。なんのことはない旋律を主題に壮大な変奏曲を作り上げた即興的な才覚は、ディアベリ変奏曲などを聴くとよくわかる（バッハやモーツァルトの変奏曲と比べると、なんと即興的な味わいに満ちていることだろう）。

ブラームスも若いときに居酒屋でピアノを弾いて生計をたてていた。自作のピアノ協奏曲などを初演しているこ

とから、その腕前は相当達者だったはずだ。

オッフエンバックもパリで劇場指揮者として活躍していたし、ラヴェルも自作を指揮して演奏旅行も行っている。ブリテンは自作以外にも指揮者やピアニストとして活動、多くの録音を残した。

〈カルメン幻想曲〉を書いたワックスマンは、ジャズ・バンドでキャリアをスタートし、映画音楽の大家となった後も、指揮者として数々の初演に携わった。

ヴィエニャフスキは、いうまでもなく伝説のヴァイオリニストだし、ヴィトマンは現代を代表するクラリネット奏者。バッハはオルガン奏者であり、同時に宮廷楽長やカントルとして、宮廷や教会で行われる音楽すべてを取り仕切っていた。

今月取り上げた作曲家で、演奏家として名前が残っているといえないのは、教師や評論家としての活動が多かったデュカスだけ。やはり作曲家は演奏家でもあったのだ。

カペルマイスターから ヴィルトゥオーソの世界へ

古来、ヨーロッパでは、音楽家と名乗るからには演奏だけではなく、作曲もやって一人前という考え方があっ

た。音楽が学問のなかで重要な位置を占めていた頃からの流れであろう。

バッハも就いていた宮廷楽長（カペルマイスター）は、アンサンブルやオーケストラを指揮しつつ、作曲や編曲も行い、そして組織をまとめる仕事までこなしていた。イザーク、ゼレンカ、ハイドン、サリエリ、チマローザ、リストなどがいる。

音楽の舞台が、教会や宮廷から市民社会へと移っても、演奏家は作曲家を兼ねるという方程式は簡単に^{すた}廃れることがなかった。

作曲家にとっては、楽譜を出版した売り上げが生計の条件だったが、正直それはそれほど儲^{もう}からない。それよりも、ライブで自分で演奏して入場料を得るほうが実入りがよいというので、腕に自信のある演奏家が、聴衆の耳を釘づけにするような超絶技巧を駆使したオリジナル曲を披露することになる。

“ヴィルトゥオーソ”の誕生だ。ヴァイオリンのパガニーニやピアノのリストが有名だが、モーツァルトだって幼い頃から「神童コンサート」で



パガニーニ (1782～1840)

知られるようになったのだから、これは市民社会の黎明期と軌を一にするものだといってもいいだろう。

この系譜は、ヴィエニャフスキ、イザイ、ラフマニノフ、エネスコといった作曲家に繋がる。楽器を知り尽くし、技巧の誇示だけにとどまらず、演奏家の生理をわきまえた作曲ゆえに、現在でも奏される作品になったといえる。

また、宮廷がなくなっても、楽長の文化は20世紀初頭までは残っていた。マーラーは当時、もっとも有名な指揮者でもあった。フルトヴェングラーも時代を代表する指揮者だったが、つねに作曲家として名を残さなければという焦燥感に駆られていた。

ちなみに、演奏活動することがほとんどなかった、専業とっていい作曲家の先駆者は、シュベルトかもしれない。彼は幼い頃に聖歌隊に入っていたが、音楽は独学。サロンで親しい友人たちのあいで曲を発表していたのだ。シュベルトは多くのピアノ曲を書いたが、奏者にとって「運指



ラフマニノフ (1873～1943)

が自然な感じがしない」作品が多いのは、やはり彼が演奏家ではなかったせいだろう。いや、その楽器のスペシャリストではなかったおかげで、新しい音楽を切り開いたともいえるかもしれない。ヴィルトゥオーソとは真逆の発想だ。

ベートーヴェンは耳の病気が悪化するにつれ、作曲に専念するようになった。シューマンもピアノの練習のしすぎで指を痛めてから、作曲活動が本格化した。つまり、作曲だけをする作曲家というのは、かなりレアなケースだったのだ。

それでも、 演奏家は作曲する

本来、演奏家と作曲家は一体であった。それが二つに分かれたのは、産業革命の影響ともいわれている。それぞれの分野に専念することで、効率よく生産しようという分業というシステムが、音楽の現場にも押し寄せたというわけだ。

それでも、演奏家と作曲家はなかなか分かれがたいところがある、というのが現状だ。工場のように、あっさりと割り切れるものではないのだ。

まず、「楽長」の伝統だろうか、指揮者と作曲家を兼ねることは近年でも少なくない。バーンスタイン、ブーレ

ーズ、セゲルスタム、サロネンまで、枚挙に暇なし。読響に馴染みの指揮者でいえば、昨年亡くなったスコルヴァチェフスキも作曲家としての顔があった。代表作の一つ、〈管弦楽のための協奏曲〉にはブルックナーを思わせる部分があり、指揮者として得意だったこの作曲家への愛情も感じられる。

ピアニストにも多い。グルダ、ムストネン、サイ、アムラン、高橋悠治に野平一郎などなど。シュナーベルやケンプといった往年の名ピアニストも作曲をしていた。ケンプが彼の弾くシューマンのようなキラキラした曲を書いていたのに比べ、ベートーヴェン弾きというイメージが強いシュナーベルは当時最先端だったバリバリに無調な音楽を書いていた。

指揮者やピアニストとは対照的に、現代のヴァイオリン奏者が作曲家を兼ねるケースは大幅に減ったように思われる(小品やカデンツァを作曲する奏者は少なくないものの)。かつてはパガニーニやクライスラーといった作曲家がひしめいていた分野だけに、時代の流れにもっとも大きく影響を受けたのは、ヴァイオリン演奏なのかもしれない。

管楽器では、オーボエのホリガーが演奏家としても作曲家としても超一流の存在。そのホリガーの偉業を継ぐ新しい世代として目されているのが、ク



作曲するヴィトマン ©Marco Borggreve

ラリネット奏者のイェルク・ヴィトマンなのだ。

ヴィトマンは、1973年ミュンヘン生まれ。すでに作曲家としてはヨーロッパでももっとも注目されている一人であり、とくにドイツでは彼の曲を演奏していないオーケストラは見当たらないほど。ハンブルクのエルプフィルハーモニーのオープニング企画でも、2時間にわたるオラトリオを作曲している。

クラリネット奏者としても第一人者だ。彼の演奏したモーツァルトの五重奏曲を聴いたときは、循環呼吸を使って息の長い旋律が歌われ、フレーズごとの巧みな音色変化にすっかり魅了された。

今回、読響定期で演奏されるヴィトマンのクラリネット協奏曲〈エコー＝フラグメンテ〉では、作曲者自身が独奏パートを担当する。類い希なる才能をもった作曲家と演奏家の二つの面を同時に味わえるいい機会だ。

(すずき あつふみ・音楽評論家)

心に残るクラシック

恩田 陸 ——②

Riku Onda

ブラームスのやるせなさ

ブラームス：交響曲第一番



©読売新聞社

俗に3Bと呼ばれるバッハ、ベートーヴェン、ブラームスだが、子供の頃から最も親しみを覚えていたのは、圧倒的にブラームスだった。初めて〈二つのラプソディ〉をピアノで弾いた時の「心の震え」は今でもくっきりと覚えている。

例えば、この三人に何かを相談するでしょう。

バッハに職場の悩みを打ち明ける。彼は、「うん、うん」と頼もしくじっくり耳を傾け、分析。「わかった、要するに、君はその取引先とは合わないんだな。よし、担当替えるよう課長に言っとくから」と問題解決策を直ちに提示。その場で課長に電話してくれる。しかし、相談したほうは、なんだかややもした気分だ。こっちは、その取引先にいかに問題があるかを聞いてほしかったのであり、自分がいかに不当な目にあい、不愉快な思いをしたのかを聞いてもらいたかったのだ。確か

に一件落着はしたものの、なんだか肩透かしを喰らったような心地である。

ベートーヴェンに家庭内の問題を打ち明ける。ねえあなた、実家の母の具合が思わしくないようなの。元々持病はあったんだけど、お隣と駐車場の境界線の件で揉めてるのが心労になってるみたい。あそこ、ずっと前から問題だったんだけど、お隣もおじいさんが亡くなって、息子がどこかの不動産業者を連れてきたらしくって、いろいろ入れ知恵されてるみたいなのよ。あたし、ちょっと帰って話を聞いてくるから、あなたも相談に乗ってくださいね。場合によっては、あなたも今度一緒に来て、みんなと話してくださらない？

彼は、仕事のことしか頭にないので上の空。「うん、うん、分かった、行^{あいづち}っておいで」と相槌のみ。が、数日して、キッチンの明かりが消えているのに気付く、「あれ、お母さん、どこ行ったんだ？」と不思議そうに娘に尋ね、

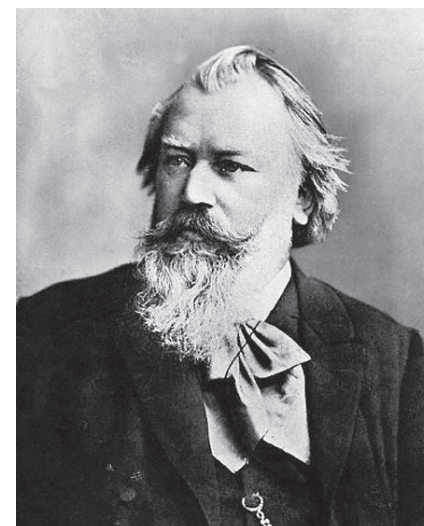
「お父さん、お母さんの話聞いてなかったの？」と娘を立腹させる。

やっぱり、何か相談するならブラームスだろう。特に、はっきりと言葉にできない胸の不安を打ち明けるなら彼だ。私、もうあの人のことが分からなくなってしまいました。ううん、分かっていると思っていたこと自体、間違いだったのかも。最近、特に変なんです。心ここにあらずというか、何かの拍子にひどく暗い目をする瞬間があって。みんな、思い過ごしだって言うんですけど、私にはどうしても納得がいなくて。

ブラームスなら、このような打ち明け話に、決して明快な解決策は示してくれないかもしれないけれど、じっと耳を傾けて共感してくれるような気がする。

ブラームスの曲には「揺らぎ」があって、水面のようにいつも光と影がチラチラと動いている。移ろっている。ベートーヴェンに「感動的」「叙情的」「劇的」などの漢語の形容詞がふさわしいのとは対照的に、ブラームスは「やるせない」「もどかしい」「せつない」などの、ひらがなの形容詞がふさわしいような気がする。

そんなわけで、私のアイドルはブラームス。いつとき、取り憑^つかれたようにブラームスのピアノ協奏曲ばかり（一番、二番を交互に）聴いていた時期があった。しかも、ピアニストを替えて。日に日にCDの棚にブラームス



ブラームス（1833～1897）

のピアノ協奏曲だけが増えていく。

ブラームスのピアノ協奏曲はオーケストラもガチ。ピアノ協奏曲というより、ピアノ入り交響曲と言ってもいいくらいだ。そのオーケストラの素晴らしさにうっとりしているうちに、ふと、「じゃあオーケストラだけの交響曲も聴いてみたら？」と思いついた。それほど、長いことピアノしか興味がなく、そう思いつくまでに長い歳月が掛かった。そこで初めて聴いたのが交響曲第一番である。

ものすごい衝撃を受けた。出だしから、ブラームスのやるせなさ全開。以来、いろいろ聴くようになったものの、交響曲では今でもブラームスの一番が一等好きだ。何度聴いても、あの曲が始まった瞬間に「うわーん」と声を出して泣きたくなる。

◎ヴィオラ奏者

富田大輔

Daisuke Tomita

熱く、楽しく。
日々刺激的です。

「1月は、何と言っても読響の常任指揮者シルヴァン・カンブルランの月となります。ブルックナーやベートーヴェンなど計6公演。聴きどころを教えてください」

定番のレパートリー曲でも、カンブルランさんが振るとまったく違って本当に面白い。特に、名曲中の名曲であるベートーヴェンの交響曲第5番〈運命〉を、どういうふうに料理するのか非常に楽しみです。ヴァイオリン・ソリストのイザベル・ファウストさんにも期待しています。実は、数年前、他のオーケストラと一緒に演奏する機会がありました。特に、アンコール曲で弾いたバッハの無伴奏ソナタの素晴らしさに感動し、それからの大ファンで何度かリサイタルにも足を運んでいます。何より音がすっきりしていて、右手のテクニクがすごい。彼女の表現力や音の響きをぜひ聴いてください。

読響に入って半年が過ぎました。いつも感じていることですが、読響の音

は、とにかく「熱い」。気持ちというか、音以外のものがたくさんプラスされている。そして、楽員がただ仕事として演奏しているのではなく、とにかく楽しんでいるんです。また、他のオーケストラでは定番の曲を回していくことも多いのですが、読響は曲目も挑戦的で指揮者のこだわりも強く、日々刺激をもらっています。

「ヴィオラの魅力はどのようなところですか」

絵に例えると、中心はやはりヴァイオリンやフルートなどでしょうか。しかし、その絵の場所や時間、情景などシチュエーションを作っているのが、ヴィオラなのです。他のセクションの楽員がちゃんと聴いてくれ、当てにしてくれていることを、ひしひしと感じます。オーケストラ全体に影響を与え、頼りにされるようなヴィオラの音をこれからも作っていきと思っています。

「高校卒業まで三重県熊野市で過ごす。東京芸術大学大学院卒業後、日本フィルハーモニー交響楽団を経て、昨年5月読響に入団。これまで20近くのオーケストラでエキストラを務めるなど、経験も豊富だ」

歌やヴァイオリンが趣味だった母親



の影響で、5歳からヴァイオリン教室に週一度通い始めました。練習嫌いでしたが、年一回の発表会が待ち遠しく、とにかく本番を楽しみにしている小学生でした。中高の6年間、三重大学の教授からレッスンを受けるため、毎週2時間半かけて、母親運転の車で熊野から津に。「何でもいから一つ自信が持てるものを身につけさせたかった」と母親から聞いて、身にしみて感謝しています。

その後、進学など将来を考慮して、ヴァイオリンからヴィオラに転向。名古屋の大学に入学しましたが、学園祭の演奏会で隣に座った芸大生の妻^{すこ}に圧倒され、「もっと広い世界に行ってみたい」と、1年後に東京芸術大学に進学しました。

演奏で食べていこうと何となくは思

っていてチャレンジしました。3回目です。やっとの合格でしたが。

「読響での日々はいかがですか。最近引っ越したと聞きました」

楽員の皆さんは当然やっていることですが、まずリハーサルの前に、「譜読み」をきっちりやること。準備を万全にした上で自由に弾けるようにならないと、自分のやりたいことはできないと最近強く感じています。ですから、出番の2、3プログラム前には楽譜を取り寄せて練習しています。

昨夏八王子市に引っ越し、小さいながらこだわりの防音室も作りました。妻はフリーのヴァイオリニストで、ヴァイオリンが遊び道具の3歳になる一人娘が、教室に通うようになりました。休みは娘ともっばら自転車で散策し、すっかりイクメンパパです。

上岡敏之と木管メンバーが繰り広げる白熱のアンサンブル

2/6 (火) 19:30 第17回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※18:50から解説

《上岡敏之と読響木管メンバーによる室内楽》

ベートーヴェン：セレナーデ (Fl & Pf) ルーセル：ディヴェルティ
スマン (六重奏) プーランク：ピアノと木管のための六重奏曲 ほか
ピアノ：上岡敏之 フルート：倉田 優 (首席) オーボエ：北村貴子
クラリネット：金子 平 (首席) ファゴット：井上俊次 (首席) ホルン：日橋辰朗 (首席)



上岡敏之

ロシアの巨匠テミルカーノフが振る《極上のロシア音楽》

2/10 (土) 14:00 第204回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

2/11 (日) 14:00 第204回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

2/12 (月) 14:00 第101回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

チャイコフスキー：ピアノ協奏曲 第1番 ラフマニノフ：交響曲 第2番
指揮：ユーリ・テミルカーノフ (名誉指揮者) ピアノ：ニコライ・ルガンスキー



ユーリ・
テミルカーノフ

練達の指揮が〈ローマの松〉で輝かしく壮大な響きを生む！

2/16 (金) 19:00 第575回 定期演奏会
サントリーホール

チャイコフスキー：幻想曲〈フランチエスカ・ダ・リミニ〉
ラフマニノフ：パガニーニの主題による狂詩曲
ラヴェル：組曲〈クープランの墓〉 レスピーギ：交響詩〈ローマの松〉

指揮：ユーリ・テミルカーノフ (名誉指揮者) ピアノ：ニコライ・ルガンスキー

※ 一部曲目が当初予定から変更されました。



ニコライ・
ルガンスキー

巨匠の至芸が心に響く テミルカーノフの〈新世界〉

2/20 (火) 19:00 第609回 名曲シリーズ
サントリーホール

2/21 (水) 19:00 第19回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール (大阪)

2/22 (木) 19:00 名曲シリーズ 福岡公演
アクロス福岡シンフォニーホール



レティシア・モレノ

グリーンカ：歌劇〈ルスランとリユドミラ〉序曲 プロコフィエフ：ヴァイオリン協奏曲 第2番
ドヴォルザーク：交響曲 第9番〈新世界から〉

指揮：ユーリ・テミルカーノフ (名誉指揮者) ヴァイオリン：レティシア・モレノ

2 月 公演の聴きどころ

2月は79歳のロシアの世界的巨匠テミルカーノフ (読響・名誉指揮者) が登場する。10日と11日の《マチネーシリーズ》、12日の《みなとみらいホリデー名曲シリーズ》では、マエストロ得意のロシア音楽で円熟した境地を披露する。メインのラフマニノフの交響曲第2番では、深く温かなサウンドを引き出し、スケールの大きな世界を描くだろう。また、協奏曲ではロシアを代表する名ピアニスト、ルガンスキーが、誰もが知る傑作であるチャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番で共演。ルガンスキーは、マエストロが長年率いるサンクトペテルブルク・フィルとも度々共演している。名コンビが濃厚なロシア情緒をたっぷりと歌い上げる。

16日の《定期演奏会》では、テミルカーノフがレスピーギ〈ローマの松〉、ラヴェル〈クープランの墓〉など色彩的で華麗な作品群を取り上げる。ロシアものが十八番のイメージが強いマエストロが、イタリア・フランスものをどう聴かせてくれるのか、期待が高まる。前半ではルガンスキーが、超絶技巧と甘美な情感がマッチしたラフマニノフの名曲〈パガニーニの主題による狂詩曲〉で豊かなひらめきを発揮し、聴衆を魅了する。

20日《名曲》、21日《大阪定期》、22日《福岡公演》では、テミルカーノフがドヴォルザーク〈新世界から〉で圧倒的なクライマックスを築く。テミルカーノフ&読響のコンビが大阪・福岡で公演を行うのは今回が初めて。前半には、テミルカーノフも認め、ゲルギエフ、メータ、サロネンらと共演するスペイン期待の新星ヴァイオリニスト、モレノがプロコフィエフで共演。ロシア民謡を思わせる旋律を、伸びやかな音色で自在に弾きこなす。

《読響アンサンブル・シリーズ》は6日の開催。指揮者の上岡敏之がピアニストとして出演し、読響の木管メンバーとプーランクの六重奏曲などを披露する。ユニークな解釈で作品の神髄に迫る上岡と木管メンバーの息の合ったアンサンブルをお楽しみに。

(文責：事務局)

読響チケットWEB

検索

小林研一郎が得意のチャイコフスキーで渾身のタクト!

3/3 (土) 15:00 第8回 パルテノン名曲シリーズ
パルテノン多摩大ホール

チャイコフスキー：弦楽セレナード

チャイコフスキー：交響曲 第5番

指揮：小林研一郎 (特別客演指揮者)



小林研一郎

胸に迫る旋律。マズアが振る《ドイツ・ロマン派名曲選》

3/10 (土) 14:00 第205回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

3/11 (日) 14:00 第205回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ウェーバー：歌劇《オイリアンテ》序曲

メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲

シューマン：交響曲 第3番《ライン》

指揮：謙＝デイヴィッド・マズア

ヴァイオリン：アラベラ・美歩・シュタインバッハー



謙＝デイヴィッド・マズア

俊英ナナシが R. シュトラウスの傑作で熱いドラマを生む!

3/16 (金) 19:00 第576回 定期演奏会
サントリーホール

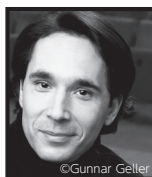
モーツァルト (ブゾーニ編)：歌劇《ドン・ジョヴァンニ》序曲

ブゾーニ：ヴァイオリン協奏曲

R. シュトラウス：交響詩《ツァラトゥストラはかく語りき》

指揮：ヘンリク・ナナシ

ヴァイオリン：ルノー・カプソン



ヘンリク・ナナシ

聴衆を熱狂へと誘う、“炎のマエストロ”の《幻想交響曲》

3/20 (火) 19:00 第610回 名曲シリーズ
サントリーホール

3/21 (水祝) 14:00 第102回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

ロッシーニ：歌劇《セビリアの理髪師》序曲

ビゼー：《アルルの女》第2組曲

ベルリオーズ：幻想交響曲

指揮：小林研一郎 (特別客演指揮者)



小林研一郎

興奮のリズム! カンブルランのベートーヴェン第7番

4/7 (土) 14:00 第206回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

4/8 (日) 14:00 第206回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ラモー：歌劇《ダルダニウス》組曲から

モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲 第5番《トルコ風》

ベートーヴェン：交響曲 第7番

指揮：シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者)

ヴァイオリン：佐藤俊介



シルヴァン・カンブルラン



佐藤俊介

“チーム長原”が繰り広げる二つの弦楽八重奏曲

4/9 (月) 19:30 第18回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00からトーク

《長原幸太リーダーによる室内楽》

メンデルスゾーン：弦楽八重奏曲 作品20

エネスコ：弦楽八重奏曲 作品7

ヴァイオリン：長原幸太 (コンサートマスター) ほか



長原幸太

カンブルランが振る《くるみ割り人形》&《春の祭典》

4/13 (金) 19:00 第611回 名曲シリーズ
サントリーホール

4/14 (土) 14:00 第103回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

4/15 (日) 15:00 第9回 パルテノン名曲シリーズ
パルテノン多摩大ホール

チャイコフスキー：バレエ音楽《くるみ割り人形》から

モーツァルト：クラリネット協奏曲

ドビュッシー：クラリネットと管弦楽のための第1狂詩曲

ストラヴィンスキー：春の祭典

指揮：シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者)

クラリネット：ポール・メイエ



シルヴァン・カンブルラン



ポール・メイエ

常任ラスト・シーズンに贈る、マーラー晩年の傑作

4/20 (金) 19:00 第577回 定期演奏会
サントリーホール

アイヴズ：ニューイングランドの3つの場所

マーラー：交響曲 第9番

指揮：シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者)



シルヴァン・カンブルラン

松戸特別演奏会

■ 2/27 (火) 19:00 松戸・森のホール21 大ホール

指揮：小林研一郎 ヴァイオリン：服部百音

モーツァルト／歌劇〈フィガロの結婚〉序曲

メンデルスゾーン／ヴァイオリン協奏曲

チャイコフスキー／交響曲 第6番〈悲愴〉

[料金] S ¥4,000 A ¥3,000

[お問い合わせ] 森のホール21チケットセンター 047-384-3331

ウェスタ川越特別演奏会

■ 3/4 (日) 14:00 ウェスタ川越

指揮：小林研一郎

チャイコフスキー／弦楽セレナード、交響曲 第5番

[料金] S ¥6,000 A ¥4,000 (大学生以下 S ¥5,000 A ¥3,000)

[お問い合わせ] ウェスタ川越 049-249-3777

読響チケットセンター 0570-00-4350

(大学生以下の取り扱いはウェスタ川越のみ)

都民芸術フェスティバル

■ 3/5 (月) 19:00 東京芸術劇場

指揮：小林研一郎 ピアノ：仲道郁代

チャイコフスキー／歌劇〈エフゲニー・オネーギン〉から“ポロネーズ”

グリーグ／ピアノ協奏曲

チャイコフスキー／交響曲 第6番〈悲愴〉

[料金] A ¥3,800 B ¥2,800 C ¥1,800

学生 A ¥3,000 学生 B ¥2,000 学生 C ¥1,000

[お問い合わせ] 日本演奏連盟事務局 03-3539-5131 (平日 10:00 ~ 18:00)

座間公演 ～珠玉のオーケストラ名曲選～

■ 3/24 (土) 14:00 ハーモニーホール座間

指揮：円光寺雅彦

スメタナ／交響詩〈モルダウ〉

ビゼー／歌劇〈カルメン〉から“アラゴネーズ”“間奏曲”“闘牛士”

エルガー／行進曲〈威風堂々〉第1番

ラヴェル／ボレロ ほか

[料金] S ¥5,000 A ¥4,000

[お問い合わせ] ハーモニーホール座間 046-255-1100

H ighlights of 2018-19 season

2018-19シーズンの聴きどころ③

読響が2018-19シーズンにお届けするコンサート、今月号では、パルテノン名曲シリーズのプログラムをご紹介します。交通至便なパルテノン多摩(東京都多摩市)で、週末の午後に名曲の数々をお楽しみいただきます。来季は会場の長期修繕工事が予定されるため、これまでより1回少ない計3回の開催になります。

パルテノン名曲シリーズ

第9回



シルヴァン・カンブララン
©Shin Yamagishi

4月は常任指揮者シルヴァン・カンブラランがタクトをとり、チャイコフスキー〈くるみ割り人形〉にストラヴィンスキー〈春の祭典〉と、ロシアを代表するバレエ音楽でスタートします。クラリネットの世界的名手、ポール・メイエを迎えるモーツァルトのクラリネット協奏曲などでは、カラフルで柔らかい音色がステージを満たすでしょう。



ポール・メイエ
©Shin Yamagishi

第10回



井上道義

円熟を深めるベテラン指揮者、井上道義は、6月にベートーヴェン〈田園〉交響曲を核とした演目で、スケール

の大きな解釈を披露します。ドヴォルザークのチェロ協奏曲では、国内の若手チェリストでは筆頭格の存在、宮田大が独奏を務めます。郷愁に満ちた2曲の心温まる味わいを、名匠と気鋭のコンビが存分に引き出します。



宮田大
©Yukio Kojima

第11回

9月に登場するフィンランドの実力派指揮者、ヨーン・ストルゴーズは、読響とは初の顔合わせになります。お国物のシベリウスから、叙情的な旋律が壮大にクライマックスを築く交響曲第2番を取り上げます。前半ではショパンのピアノ協奏曲第1番で、進境著しい小山実稚恵が起伏に富んだソロを紡いで、聴き手を惹きつけます。



ヨーン・ストルゴーズ
©Marco Borggreve



小山実稚恵
©Wataru Nishida